慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 戦力論 : その静態的考察 |
| Sub Title | |
| Author | 加田, 哲二 |
| Publisher | 慶應義塾理財学会 |
| Publication year | 1943 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.37, No.5 (1943. 5) ,p.373(1)- 414(42) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19430501-0001 |
| Abstract | |
| Notes | |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19430501-0001 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應大學教授
經濟學博士　加田哲二　著

# 日本經濟新論

## 前篇　近代日本の經濟的發展

全國民の旺盛なる敢闘精神と、優秀なる兵器と、長期戰に耐へ得る經濟力とを戰爭に勝ち抜く爲の三要件とすれば、經濟力の高度の組織化こそは我が當面の根本的な課題である。本書はこの使命に應へんが爲に、我が經濟の全體的理解を目指して先づ近代經濟の一般的傾向を取上げ、次で日本經濟の近代的發展を說く。維新以後昭和初期に至る發展史……事象の流れを求め、本質を把握し、そして現代の理解に至る大路が玆に拓かれたのである。

B6　四〇六頁
口絵　八頁
賣價　二圓七〇錢
送料　二〇錢

**內容要目**

**第一部、近代經濟の本質**　基本社會と經濟……經濟社會の發展……近代の經濟……現代の經濟的傾向……**第二部、近代日本の經濟的發展**　序論……日本社會の特質……新經濟への基礎工作……明治十年代の經濟……日清戰爭時代の經濟狀態……日露戰爭時代の經濟狀態……歐洲大戰當時の日本經濟……世界大戰後の經濟……恐慌生產組織の高度化……資本の集中と財閥……**附錄、參考文獻**

東京市芝區三田二ノ一
慶應出版社
電話三田(45)一九七二
振替東京一八五一〇八

三田學會雜誌　第三十七卷　第五號

# 戰力論

## ——その靜態的考察——

加田哲二

一　戰力の要因
二　戰爭の性格の進展と戰力
三　現代戰爭の性格
四　戰爭における武力の地位
五　軍構成の基礎
六　動員可能量の制約
七　經濟戰力との關係
八　資源問題
九　軍における精神力
一〇　國民における精神力
一一　思想戰
一二　戰力としての自然

戰力論

## 一

戰爭を遂行するためには、力を必要とする。戰爭は、これを保持發展せしめる國家全體の力によつて遂行せられる。從つて、戰爭の遂行を可能ならしめる力には、種々なものがある。これを大別して、物理的並に精神的な力とすることが出來るであらう。

戰爭の目的は、相手方たる敵國の意思を、何等かの形態において、壓服して、自國の意志を、そこに實現するにある。そこに戰爭目的が設定されなければならない。戰爭が、いはゆる防衛的戰爭であつても、また攻擊的戰爭であつても、目的が設定される。防衛戰爭と攻擊戰爭との區別は、一見困難である。なんとなれば、最良の防衛は、攻擊にあるからである。いづれにせよ、戰爭は、戰爭目的を持つ意志の所產である。從つて、戰鬪的精神が最初に存在し、または形成されなければならない。

かゝる戰鬪的精神が形成せられ、それが現實に實現せらるゝためには、戰爭または戰鬪の遂行者がなければならない。廣義における戰鬪の遂行者または手段として考へられるものは、軍そのものである。軍は、兵員、兵器、組織から成つてゐる。戰爭の遂行に當つては、軍が最も重要な要素であることは、いふまでもないところである。かゝる軍は、戰鬪的精神と物的戰鬪力とのみごとな集成結合があつて、戰力の基本を構成する。

軍における組織としての將兵は、戰力の負擔者、實行者であり、これによつて、戰力は戰場において、發現せられる。從つて、將兵は、戰力の綜合者である。この綜合は、軍組織と武器とを集成したものである。組織としては、人的要因としてみられ、これによつて、動かされる兵器、武器は、一つの戰力の集成である。前者が、能動的活動者であるに對して、後者は受動的存在である。かゝる受動的存在としての兵器の集成は、物的戰力を現はすものである。むしろ物的戰力としての兵器は、たゞ、活動的組織力としての將兵を通じてのみ、その力が發現され得る。

戰爭の遂行に當つて、軍が最重要の要因があることは、既に指摘したところであるが、軍の發揮し得る戰力——精神的並に物的なるものゝ綜合としての——は、國家全體の力によつて、條件づけられねばならない。第一に、軍の組織においては、(イ)總人口、(ロ)總人口における男子壯青年者の割合が、これであり、物的戰力については、(イ)一國の經濟發展の程度(ロ)その中における軍事生產の占め得る地位によつて、限定される。更に重要なことは、戰爭に對して、國民がいかなる態度を採るかである。

これらを綜合して觀察するところに、戰力の判定の基礎が與へられる。しかもなほ、戰力發現の條件は、かゝるものゝみでなく、自然的要因をも數へなければならない。戰爭は、ある領域において行はれるものである。戰場がこれであるが、その戰場の形狀・地位・氣候・戰場への距離は、戰力の實現にある條件を與へるものである。さういふ意味において、戰爭領域は、自然の一部ではあるが、防衛軍にとつては、戰力——消極的ではあるが——の一部を形成し、攻擊軍にとつては、戰力の發現を妨害せらるゝものであるから、戰力消耗の一原因として考察すべきものであらう。

## 二

戰力問題は、戰爭の性格が進展して、その規模の擴大從つてまた消耗の增大によつて、緊急化して來た。戰爭は、いかなる場合においても、國力の問題と關聯するものであるが、それが一國の力の一小部分を消耗するに過ぎない場合には、大きな問題ではない。古代・中世・近代を通じて、大戰爭がなかつたのではない。國を擧げて戰ふやうな戰爭も、歷史の上には、珍らしくはない。たゞ、戰爭の遂行者である國家そのものは、近代にいたるまで、十分な

發展を遂げることが出來なかつた。國家の包含する人口、その持つてゐる政治の組織並に經濟の運營は、いづれも小範圍に局限されてゐて、一國家が戰爭のために滅亡するにいたることがあつても、それは、直ちに從服國によつて、處理され得るやうな簡單な場合が多かつた。しかるに、近代に至つて、國家は、民族的國家として發展して來た。その特長は、廣汎な領域における多數の人口を支配するところにある。さういふ近代的國家と國家との戰爭は、自然大戰爭に發展せざるを得ない。これを促進したものは、戰爭技術上の革命である。火藥の進歩・大砲・小銃の發展が、これである。このことは、騎士の戰爭を民衆の集團的戰爭に進展せしめてゐる。戰鬪專門家としての騎士・金城湯池を誇つた領主の城塞を、農民兵・傭兵のために擊破せられ、火藥の前には、單なる石塊の集積に過ぎざるに到つた。しかも、近代初期の戰爭は、その物的戰力の基礎としての經濟的技術の未發達によつて、いはゆる大規模戰爭に發展して行かなかつた。

勿論、ヨーロッパにおける近代初期から第十八世紀中葉にいたるまでの戰爭は、漸々大規模戰爭への基礎を作り上げてゐた。それは、戰爭の內外に對する意味においてさうであつた。

戰爭の對內的意味においては、騎士戰爭から民兵または傭兵制への進展である。騎士戰爭は、中世的手工業に照應する。甲冑の美、刀劍の精、これは均しく中世的手工業の產物である。かくのごとき手工業的產物の供給は、その小規模生產のために限定されてゐる。しかるに、民兵または傭兵は、集團的組織に持つものであるから、そのためには、巨大な武器・服裝などの供給を前提としなければならない。かくて、ゾンバアトが、その著「戰爭と資本主義」で、指摘してゐるやうに、規格統一的大量生產の出現を促す重要な要因を形成するに至る。

このやうな大量生產制が確立せらるゝに至つたのは、產業革命前後における技術の發展のためである。手工工場制への手工業からの發展、更らに、それの機械工場制への進展によつて、大量生產の問題は、解決されて行く。それと前後して、ヨーロッパにおける兵制上の變革は、國民軍の形成である。國民軍は、その基礎を國民全體の上に置いてゐる。常傭の兵または、義勇軍的性格を持つ民兵に對して、國民軍は、すべての男子國民から徵募せられる。この兵制の實行者は、ナポレオン・ボナパアトであつた。フランス革命は、單に政治機構を、國民的基礎の上に置いたのみでなく、政治における獨裁者ナポレオンの出現によつて、軍の常傭國民化が行はれた。

ナポレオンは、常傭國民軍を健全な財政の上に置かうとした。戰爭に必要なものは、金・金・金であるといふ言葉は、ナポレオンのいつたところであるといはれてゐるが、かれは、また、次のやうな言葉を發してゐる。「國庫はすべての基礎である。」「國家は戰時においても、平時における と同樣十分國費を賭ひ、租稅の前拂にすぎない公債の手段によらず、戰費を支辨するのでなければ、國庫を有してゐるといへない。」ナポレオンは、平時から戰時への財政準備の必要を認識し、租稅と公債への健全な政策の必要を感じてゐた。一八一〇年十二月、煙草國營令の冒頭には、次の言葉を加へてゐる。

「予は、常に國庫に意を用ひ來つた。大帝國の國庫は、不時の場合に備へる手段を有してゐなければならず、最も重大な戰爭にも新しい課稅なくして、賄ひ得るやうでなければならない。新課稅は、その施行の初めの中は、餘り收入を期待出來ないものである。

最も進歩した國民は、かゝる場合の唯一の非常手段は、よく計畫された公債であることを知つてゐる。しかし、この手段は不健全であると同時に不幸である。未來の世代の人民に前以て賦課することであり、現在の人民が最も尊重する所のかれらの子供の幸福を犧牲にする。この手段はまた公共の組織を漸次消耗し、次世代の罵言を招

くものである。

吾々は、他の原則を採用した。吾々は平時人民に殆ど負擔をかけない多くの課稅が必要である事を知つてゐる。即ち稅率は、僅かしか高められず、之によつて、國家危急の際の國庫をすべて支辨し得るからである。」（戰爭、政治・人間――ナポレオンの言葉――柳澤恭雄譯）

ナポレオンは、かやうに、國家の戰時に對する計畫を進めてゐる。自由放任主義の修正による產業の保護奬勵・財政制度の確立、國營事業による國家收入の增加を計り、もつて、戰爭に備へてゐた。この時代においては、一方に、產業革命が進行しつゝあり、他方に國民常備軍が建設されつゝあつた。この二つの基礎の下において、ナポレオンは、そのヨーロッパ征服の戰爭を實行した。この戰爭において、問題となつたところは、いかにして、戰爭に所要の資金を獲得するかであつた。即ち、產業革命による經濟の發展は、市場に多量の財貨を供給し得るに至つた。問題は、これを獲得する資金である。從つて、當時の、またその以後の戰爭經濟は戰爭財政の問題として提起せらるゝに至つたのである。當時公債論が、經濟學の論議の對象となつたのも、このためであつた。この傾向は、ナポレオンの沒落、英帝國の確立によつて、大規模戰爭の跡を絕つに至つた第十九世紀の戰爭を支配するものであつた。戰爭は、以前にもまして、戰爭資金の問題として考へられてゐる。

## 三

第十九世紀のヨーロッパを通じて、このことは事實として現はれてゐる。第十九世紀初期の產業革命を通じて、增大された生產物は、輕工業であつた。しかるに戰爭資材は、重工業的なものにおいて重要である。この方面における生產は第十九世紀の後半において發展してゐる。先進經濟國としてのイギリスにおいて、その資本主義の重工業化の行はれるに至つたのは、西曆一八七〇年代に屬してゐる。比較的產業革命の遲延してゐたドイツにおいても、重工業の發展は、イギリスに續いてゐる。

かゝる重工業の發展を基礎的事實として戰爭の樣相が變化してゐる。一方において、隣接する國家の利益の對立によつて、それぞれの國民的基礎において、戰爭が行はれた。普佛戰爭（西曆一八七一年）のごときものが、その代表的なものであらう。他方において、イギリスの世界的帝國は第十七・十八世紀において、オランダ・フランスの鬪爭における勝利によつて成立した。一八一五年のナポレオン沒落後におけるウィーン會議は、イギリス世界帝國の確立を、ヨーロッパ諸國の承認であるといふことが出來る。しかるにイギリスは、その植民地的領域を增大しつゝあつたが、爾餘の諸國も、植民地の要求を提起し來つた。近代初期の商業帝國主義は、こゝに轉じて、工業帝國主義を發生せしめた。この戰爭はヨーロッパ列强に對する後進諸領域の國家に對する問題であると同時に、この問題を繞つての諸列强間の鬪爭である。

列强間の鬪爭は、近代的商業帝國主義としての植民地戰爭に現はれてゐるが、第十九世紀の後半から、これを更に大きな規模と性格とにおいて、擴大再生產せらるゝに至つた。このことを可能ならしめるものは、（一）列强の生產の增大と國內販路の狹小化による國外販路の追求（二）交通機關――汽船汽車の發展である。

この鬪爭が植民地獲得競爭の可能性が存する間は、酷烈の程度において大なるものではない。第十九世紀の後半におけるアフリカ內陸地帶の分割の可能性のあつた時代のごとき場合である。即ち一八七〇年代において、アフリカ面積の一〇％が分割されたのみであつたが、一九〇〇年にはその九〇％が分割された。かゝる犧牲領域の狹少化は、植民地的分割から植民地の再分割の問題を惹起せしめる。この問題は純然たる强大國間のことである。戰爭は、

その性格において酷烈たらざるを得ない。第一次ヨーロッパ戰のごときが、これである。

第一次ヨーロッパ戰爭の重要性は、三つの點において現はれてゐる。

第一、戰爭の參加國の數の多いことである。西紀一九一四年の勃發當時から一九一九年の休戰にいたるまでに參加した國家は、數十に及ぶのであるが、そのうち中央ヨーロッパ側においては、ドイツ、オーストリアー、ハンガリー、聯合國側においては、イギリス、フランス、ロシア、イタリア、日本、アメリカ合衆國などの世界の主要國がある。これらの諸國は、戰力としての工業生産力に富んでゐることである。

第二、この戰爭が世界戰爭の樣相を呈するに至つた理由は、世界爭覇戰であることである。西紀一八一五年のウイン會議によつて確立され、その後において發展したイギリス帝國は、第十九世紀の後半において、名實ともに世界帝國であつた。世界帝國としての大英帝國は、存續百年にして、挑戰されてゐる。挑戰國は、ドイツである。ドイツは、第十九世紀の後半において、急激に發展し、その富力において、また工業力において、イギリスに追ひつかうとしてゐる。殊にドイツの重工業の發展は、すさまじいものがあつた。第十八世紀の後半から第十九世紀の初葉にかけて、イギリスとフランスとの間に世界制覇の戰爭が行はれてゐる。この戰爭は、國民的政治革命と産業革命とを、その基礎に置いてゐる。いまや、第一次世界戰爭としてのイギリス對ドイツの戰爭は、發展しつゝあつた金融と重工業とを、その基礎に置いたものである。植民地の再分割が、その重要目的となつてゐることはいふまでもない。

第三、戰爭の期間の長期に及んでゐることである。それは、一九一四年の勃發當時から四年三ケ月の時日を經過してゐる。この期間は、歷史の上に記錄されてゐる長期戰爭、たとへば、百年戰爭・三十年戰爭・七年戰爭・十字軍といふやうなものに比較すれば、時間的には、長期といふことを得ない。しかしながら、同盟側、聯合國側合せて、七千萬以上に上る動員と戰爭の酷烈性とは、前古未曾有のものであつた。戰線の擴大もまた豫想外のものであつた。

かくのごとき戰爭を遂行するためには、從來のあらゆる戰爭の經驗以上のものを必要とした。それは、戰爭の進展に應じて、總力戰的樣相を呈するに至つた。從來の戰爭は、戰爭を遂行する資金の問題が第一に提起せられたが、いまやその問題とともに、戰時需要を充足するための國家の全能力を活用することが問題となつた。資金は、需要を喚起するが、その資金は、甚しく巨額なものであつた。この需要を充足するためには、國家並に國民の全能力を活動狀態に置かねばならない。それは、全國民の總動員を意味する。單に、戰爭行爲のためのみでなく、その行爲を支持繼續するために、動員されねばならなかつたのである。そのゆえに、わたくしは、第一次世界戰爭を、總力動員戰爭と呼ぶ。この戰爭においては、國民は、それぞれの地位において、また特に軍需的産業の方面において、激勵せられ、動員されてゐる。軍需への集中的動員が行はれたのであるが、いまだその編成替は大規模に行はれてゐない。

今次の世界戰爭は、第一次世界戰爭よりも遙かに大である。それは、ヨーロッパにおける戰爭と東亞における戰爭とが、アメリカ合衆國の挑戰的政策によつて、合一的に世界戰爭に進展したものである。ヨーロッパ戰爭並に、東亞戰爭の經緯を冷靜に觀察すると、アメリカ合衆國の世界制覇政策と大英帝國の帝國維持政策とが顯著に動いてゐる。勿論、その間に、ドイツの膨脹政策、日本の興亞政策が存在し、ソ聯の共産的世界政策がある。それらの本質は、こゝでは問題とする餘白を持たないが、それぞれの立場において、鬪爭しつゝあつたことは事實である。こ

の事實に對して、米英の世界爭覇政策は、これを妨害し、抹殺しようとしてゐた。そこに戰爭の原因がある。

かゝる根柢の深い戰爭であるがゆえに、戰爭の目的も明確であり、從つてその酷烈な戰爭の遂行、規模の廣大性は、第一次世界戰爭を凌ぐものがある。しかも、これに參加しつゝある諸國は、既に戰爭を豫想して、少くとも六七年前から戰爭準備に懸命であつた。この點において、第一次世界戰爭との顯著な差異がめる。第一次世界戰爭においても、多少の準備は、なされてゐたが、その準備は狹少に過ぎてゐたやうである。しかるに、第二次世界戰爭においては、戰備それ自體が、巨大なものであつた。國家の全面に渉る戰爭準備が行はれたのである。

戰爭は大規模であり、酷烈たらざるを得ない。戰爭の目的からも、また戰爭の準備からも、さういふことが出來る。しかもなほ、戰爭それ自體が目的ではなく、それは單に手段であるから、一定の限度があり得る。勿論、クラウゼィッツのいふやうに、戰爭は一度で勃發すると、それ自身の論理によつて動くものである。而して、この論理は、戰力の基礎によつて、條件づけられてゐる。

## 四

戰力は、戰爭の基礎である。わたくしは、戰力を分つて、精神力と物力とし、これに加へるのに、國家並に軍の組織力をもつてした。如何なる國といへども、弱小の軍をもつものは、戰爭に耐え得ない。これは、戰爭における軍の絶對的必要性を語るものである。

現在の戰爭は、總力戰または全體戰爭であるといふ見地から、あらゆる社會的並に國家的現象に「戰」の一字を添加して、これを羅列して、全體戰爭または、總力戰爭の意義を了解してゐるかのごとき主張をなすものである。それは、恰度、物質を構成する原子を羅列して、その物質の本質を知り盡してゐると主張するやうなものであつて、



もとより素朴な見解に外ならない。それほど甚だしくないものでも、總力戰爭の形態として、武力戰・經濟戰・思想戰・外交戰などを掲げることは、常識となつてゐる。さういふ戰爭の形態は、存在するものであるから、それを擧げることは、差支ないのであるが、たゞ、それを並列せしめて、現代の戰爭を理解してゐるかのやうに考へるものがあるならば、大きな誤りであらう。

全體戰爭または總力戰爭においては、武力戰の外に、經濟戰・思想戰・外交戰が存在することは事實である。たゞ、そのありかたは、單に並列的ではない。それは、すべて戰爭目的從つてまた國家目的によつて序列が與へられる。まづ、外交戰によつて、武力戰以前に、戰爭目的と同一なものを到達することを努力するであらう。これは、外交交渉に外ならない。この外交交渉は、ある場合は武力以外の實力行使に伴はれる。相手國のある階層・民衆に對する宣傳工作のごときが、これである。その場合宣傳戰ともいはれ得る。また、平和裡に實力的効果を與へる經濟的手段がある。不買、不賣政策のごときがこれである。大東亞戰爭開始以前の一年數ヶ月の合衆國の日本に對する政策の種々相は、その最も明瞭なものである。

しかしながら、武力戰の開始――通常戰爭の勃發であるが――によつて、これらの外交戰・經濟戰・宣傳戰が終了してしまふ譯ではない。武力的攻勢と同時に、和平提唱を行ふことは、支那事變の過程においても、あつたし、英獨戰爭においては、双方ともに試みてゐる。武力を伴ふ經濟戰は、封鎖・通商破壞戰がある。短波によるラヂオ宣傳・航空機による文書の投下による宣傳戰が行はれる。これらは、戰爭においては、武力戰を主體として、それとの共同において、統一された目的のために、行はれてゐる。

これらの戰鬪の諸形態は、戰爭目的によつて、統一されて行はれる。しかも、戰爭の進展を最も促進するものは、

武力戰である。外交戰・思想戰・經濟戰は、武力戰に從屬するものでもなければ、武力戰の擔當者によつてのみ指導さるべきものではないが、それは、孤立的に行はれるものでもなければ、行はれてはならないものである。それらは、すべて有機的關聯において、遂行されなければならないのである。

從つて、戰力とは、これらのすべての形態の戰爭を遂行する力をいふのである。戰爭が、敵の力を擊滅するにある以上、そのために、最も重大な關係を有するものは、武力である。武力とは、組織された人的並に物的暴力である。こゝに組織されたといふのは、軍組織をいふ。軍組織は、（一）將士（二）兵員（三）兵器交通具の綜合的組織を意味する。從つて、武力とは、單なる人的要素でもなく、また物的要素でもない。それは、實に兩者の綜合された力である。

軍組織の第一要因は、將兵である。複數の將兵なくして、軍隊は成立しない。軍隊を構成し、これを認識せしめるものは、常に一定量以上の人間集團である。このことは、陸軍においても、海軍においてもいひ得るところである。而して、一定量以上の人間集團としての軍の持つ特色は、それが武器を持ち、戰爭目的のために、これを行使することでめる。從つて、兵員と武器の綜合としての力といふことが出來る。軍自體の武力としての戰力は、兵員數と武器の利用度によつて決定せられる。各種兵員の割合と武器の配分は、戰鬪の性質に從つて、決定せらるべきものである。たとへば、匪賊討伐のごとき場合――輕裝備を必要とする――と文明國の軍隊――これは重裝備をしてゐる――とに對する場合とは、異れる武器裝備を必要とする。これらは、戰鬪技術に關することであるから、それに對して關說することを省略しなければならない。

## 五

こゝで、われわれの必要なことは、さういふ戰力としての軍の構成の基礎となるものは、何かの問題である。まづ一般の兵員であるが、これは、一國の壯丁數によつて決定せられる。壯丁とは、普通の概念に從へば、十七八歲から四十五六歲までの男子である。軍隊を構成すべき人的要素の總數は、この數によつて規制せらるゝ。女子軍も存在するが、いまだその戰力としての價値が確定されてゐないから、軍は男子の構成すべきもの、しかも、以上の年齡層のものから形成されるものとみてよい。そこで、この年齡層の男子の全人口に對する割合が、問題となつて來る。

全人口の半數は、女子である。從つて、男子は、全人口の五割を形成する。十七八歲から四十五六歲にいたる男子數はこの全男子數の五割を占めるものとみてよいであらう。全人口中の青壯年層を、十五歲から四十九歲までと限定する場合には、アメリカ合衆國においては、二七％（一九三五年）ドイツ（一九三八年）およびイギリス本國（一九三七年）は二六％イタリア（一九三六年）およびフランス（一九三六年）二四％を持つてゐるから、この年齡層を全人口の四分の一（二五）％とみることは、大過ないことである。これが、一國の純正な意味においての兵力供給源であるといつてよい。たゞ、植民地・屬領を持つ國は、この外に、大きな供給源を持つことになる。第一次世界戰爭の場合において、イギリス並にフランスは、インド、諸植民地屬領、北アフリカなどの青壯年人口を戰場に送つてゐる。イギリス本國（大ブリテン島）の全人口は、四千七百四十萬（一九三八年）屬領におけるアングロ・サクソン人二千四百九十萬に對して、非アングロ・サクソンとしての植民地屬領原住民は、四億四千九百六十萬に及んでゐる。フランスは、本國人は四千二百萬、植民地原住民七千萬に達してゐる。ベルギー、オランダの合計人口は、千七百萬に對して、植民地人口は七千七百萬に達してゐる。ドイツは、オーストリア、スデーテン地方、チッエコの占領保護

領化によつて、ドイツ人口は九千萬に達してゐるが、植民地人口は、皆無である。かういふ事例からみると、軍への兵員供給源として主として考へられるものは、本國人口であり、植民地屬領の場合は、この總人口に對して、極めて僅かな割合だけしか、供給源としての數量を持つてゐない。

一國の全人口の四分の一が、兵力供給源として考へられ、それが全部動員せられる場合、兵の量の極限に達するのであるが、それは普通の場合可能ではない。この全人口の四分の一の男子人口は、有閑人口ではなく、一國の最も重要な生産勞働力を形成するものだからである。從つて、この壯丁層を全部動員する計畫は、單に机上の數字案としてのみ考へ得られる。普通の動員は、まづ常備現役兵は行はれ、次に豫備兵に行はれる。從つて、年々この常備兵を多量に有し、その服役期間の長いものほど、多量の兵力量を持つことになる。豫備兵期間を四十歳までと定めるならば、四十歳までに死亡した兵役終了者が、現役兵の外に、兵員給源として考へられる。次に未教育豫備兵（國民兵を含む）が兵員給源である。

これらの兵員給源は、常備軍百萬・服役年限三年とすれば、年々約三十四五萬程度の壯丁を兵營に送らねばならない。三年後には、豫備兵が、三十四五萬づゝ形成せられる。この豫備兵が、四十歳までとすれば、全豫備兵の員數は約五百萬と推定することが出來、動員可能量は六百萬とみることが出來るであらう。これは大體の計算であつて、精密なものではない。

## 六

扨て、この動員可能量が、現實的動員量として、實現するためには、二つの條件が必要であつて、それのいづれを缺いても、有力な軍を形成し得ない。

第一、軍の組織の方面から制限である。それは、軍組織の性格に由來する。すべての組織が、さうであるやうに殊に軍は、一つの嚴格な秩序組織である。統帥は、最高の命令權者から、一貫して、最下の兵員にまで達しなければならない。この命令によつて、軍は行動する。しかも、この命令は、組織的階層を通じて、下達される。この任務を行ふものが、軍における特徴である。軍の構成並に行動は、正規軍においては、將校によつて、なされる。便衣隊のごときものでも、若干の指揮者を必要とする。この將校は、軍人として特殊の教育を受けなければならない。他の領域の職能人が、さうであるやうに、軍人としての將校は、特別に養成されねばならない。大戰爭を展開する場合、往々にして、將校の數的不足を嘆じなければならないことは、戰爭の形態・規模の變化とともに、殊に動員量の增加の場合、しばしばである。將校は、士官學校あるひは兵學校出身の本來の軍人と、義務兵役の服役者から選抜せられて、將校に昇進するものとあるが、兵員の增加のやうに容易になし得ない。それは將校の上級命令者としての權威と戰鬪遂行者としての技術的役割の二つの面からしかるのであらう。さういふ場合においては、一般兵員の供給源がなほ豐富でありながら、將校の不足のために、動員し得ないことがあり得る。

第二は、更に重要なものである。第一の將校の問題は、指揮者としての多少の能力を犧牲とするならば、將校を急造することは、不可能ではない。たゞ、さういふ軍は、實力の發揮出來ない低い戰鬪力と規律の整はない軍隊に化する虞れが十分にある。第二の問題は、軍の戰力に對する絶對的條件である。それは、所要量の軍隊に對して、十分な整備を與へ、戰鬪を繼續せしめるだけの軍需要を充足し得るか否かの問題である。

このことは、直接軍に關係することではなく、戰力を形成する生産力の問題である。生産力は、一國の經濟發展の段階如何によつて異つてゐる。低度文化の社會、封建的國家、近代資本的生産の機構を持つ國家の間では、大き

な差異を持つてゐる。勞働の組織と技術の發展が、このことを實現せしめるのである。生産力は、資本的生産の採用の結果甚だしく増加してゐる。アダム・スミスのいふやうに、「われわれが、やゝもすれば、極めて簡易な仕度だと誤認する程度の仕度を、文明國における最も卑しい人々になさしめるためにさへ、數千の人々の援助と協働とが必要であるといふことがわかるであらう。いふまでもなく、彼の仕度を以て富者の非常な豪奢と比ぶれば、ひどく簡易に見えるに違ひない。けれども勤勉にして、質素なる百姓の人の仕度は、一萬の裸の野蠻人に對して、生殺與奪の絶對權を有するアフリカの王様のそれに優ること萬々である。この差に比ぶれば、ヨーロッパの王様の仕度の農民のそれに對する優越の如き恐ちくはいふに足らない。」（國富論第一篇第一章大内兵衛譯）文明國の生産力は、それ以前のものに比して、多大な發展を經過してゐる。それゆえに、わたくしが既に指摘したやうに、第十九世紀の戰爭の經濟的側面は、戰爭資金の問題であつて、戰爭のために生産が特に考慮されたのではなかつた。

しかるに、第一次世界戰爭は、その様相を變化せしめた。わたくしは、その様相の變化を、戰爭の酷烈性といふ言葉で表はしたい。それは、戰爭が大規模化すと同時に集約的となつて來たのである。このことは、當時までの生産の増加が、これを可能ならしめたものである。この生産の増加が、戰爭の一つの重大な原因ともなり、戰爭の酷烈性を實現するにも至らしめたものである。いま、第一の問題にも關係があるから、第一次世界戰爭の全期間における動員數を記して置かふ。

中央同盟國の動員兵數

| | |
|---|---|
| ドイツ | 一三、二五〇、〇〇〇 |
| オーストリア | 九、〇〇〇、〇〇〇 |
| トルコ | 一、八〇〇、〇〇〇 |
| ブルガリア | 一、〇〇〇、〇〇〇 |
| 計 | 二五、〇〇〇、〇〇〇 |

聯合國の動員兵數

| | |
|---|---|
| ロシア | 一九、〇〇〇、〇〇〇 |
| イギリス | 九、四九六、三七〇 |
| フランス | 八、一九四、五〇〇 |
| イタリア | 五、六一五、〇〇〇 |
| ルーマニア | 一、〇〇〇、〇〇〇 |
| ベルギー | 三八〇、〇〇〇 |
| セルビア | 八〇〇、〇〇〇 |
| ギリシア | 四〇〇、〇〇〇 |
| ポルトガル | 五三〇、〇〇〇 |
| 米國 | 三、八九九、七〇〇 |
| 日本 | 三〇、〇〇〇 |
| 計 | 四九、〇〇〇、〇〇〇 |
| 兩者合計 | 七四、〇〇〇、〇〇〇 |

この動員數をみると、ヨーロッパの主要參戰國においては、總人口の一割から二割程度に達してゐる。ドイツの

例をみれば、動員數は千三百二十五萬に達してゐるが、當時のドイツ總人口六千五百萬に對して、約二割である。イギリスの九百五十萬にあつては、單に本國人口からのみではなく、自治領兵並に、インド兵を包含してゐるから、本國人口の四千萬餘に對しては、約二割であらう。かやうな高率な動員は、高度の工業國でなければなし得ないところである。單に兵器の生産のみではなく、高い國民の經濟的蓄積があつて、始めて可能である。この蓄積が、軍事需要に轉化されて行くのである。いづれにせよ、人口の一割を動員し得る國は、世界の一流の工業國である。それ以外の國では、これに對して十分な援助をなし得る同盟國、または借款許容國がない以上、不可能である。たとへば、第一次ヨーロッパ戰爭においては、ドイツはオーストリア・ハンガリーを援助し、トルコ・ブルガリアを救援したのであつて、ブルガリア・トルコは自力をもつて、戰爭に參加することは、出來なかつたのである。今次の世界戰爭においても、第一次世界戰爭におけると同じやうに、アメリカ合衆國の軍事生産力の反樞軸側に對する意義は、大きなものであるといはねばならない。

## 七

現在の戰爭は、從つて、高度工業國の戰爭である。高度工業國とは、次のやうな條件を持つものである。

（一）生産の高度の機械化
（二）これに照應した熟練勞働力
（三）石炭・石油・電力エネルギーの十分な存在および利用
（四）鐵・銅・輕金屬の豐富な供給
（五）交通機關の高度化

樞軸側においては、日本並にドイツ、反樞軸側においては、米國・イギリス・ソ聯が工業國としての資格を持つてゐる。この高度工業國としての程度が顯著なものが、最高度の動員をなし得る。それは、工業の機械化によつて可能である。この生産力を強度の戰力にまで高める他の要因は、國民の食糧生産においての自給率の如何である。この自給率の高い國は、高度の安心をもつて、その工業生産力を直接の戰力に振り向けることが出來る。しかるにイギリスのやうに、その食糧の三分の二を輸入に仰いでゐた國は、まづその輸入路の確保のために、戰力を割かねばならない。イギリスにいたる制海權の確保が、これであるが、そのためには、海軍力の多くの部分を消極的防衛の用具として用ゐなければならないのである。ドイツのそれは、イギリスの輸入依存に比しては、低度であつて、約二五%であり、戰前におけるナチスの政策は、自給度の高揚化に努力してゐたし、また戰爭後において、ポーランド・デンマーク・オランダ・バルカン地帶の占領は、その點を改善したかに考へられる。問題は、生肉・乳製品・脂肪である。從つて、戰爭への條件としては、高度の工業生産力と、これと同時に高度の農業生産力とであるが、工業が農村人口の勞働者化によつて行はれてゐる以上、この兩者の實現は、甚だ困難なことといはねばならない。さういふ點から、戰爭しつゝある國においては、可能である限り、自給自足政策の樹立に努力しつゝあり、このことは、多大の勞働力を必要とするので、兵員動員は、かくのごとき經濟的條件によつて、規制せられざるを得ない。現在の戰爭において、ドイツが、前大戰よりも動員兵數が少く、約一千萬と傳へられてゐるのは、戰爭經濟の見地からは、健全であるといつてよいであらう。

戰爭の當初の動員に對する裝備は、戰備の蓄積によつて賄はれる。戰備の蓄積は、何處の國においても行つてゐるが、それには、直接的蓄積と間接的蓄積がある。直接的蓄積は、服裝・彈藥・兵器・燃料・食糧の蓄積である。これ

は、軍當局が、將來の戰爭に備へて、ある程度まで、計畫的に蓄積する。そして、動員の開始とともに、この蓄積から所要のものを使用するのである。この蓄積は、兵器のやうに變化發展するものについては、大なるものであることが出來ない。戰場において、敵側の兵器に對して、能率の低下してゐるやうな舊式のものを使用することが出來ないから、その場合は、常に、研究を行ひつゝ、世界殊に假想敵國の兵器の進歩を考慮しつゝ、兵器の改良を計り、あるひは新兵器の考案を行ひつゝ、最新最良の形態のものゝ生産力を蓄積保持して行くことである。「影の工場」といはれるものゝ建設、または少量の教育注文を民間工場に對して行つて置くごときは、これである。これは、戰爭の接近あるひは、その勃發と同時に、直ちに生産力として、多量生産の可能な形態を採らねばならない。アメリカ合衆國、または、ドイツの軍用航空機の生産力のごときは、この種の形態の最も顯著なものであらう。

たゞ、戰爭に際しては、動員、または交戰の結果としての損害破壞などのために、生産力の轉換または、その增强は著しく困難を伴ふものである。從つて、ある程度までの蓄積は、是非とも必要である。この蓄積を强調する學者に、ポッソニー（今日の戰爭）がある。しかしながら、戰備のストックは、一應退藏であるから、それだけ、再生産過程からは、脱落する。從つて、それらのものが、生産的に消費される場合と異つて、生産資本の減少となるから、生産は縮少とならざるを得ない。一國の經濟中、平時並に戰時において、軍需並に民需の割合が問題となるのは、これである。民需は、ある場合においては、軍需への迂回生産的役割を演ずるものであるから、それのみを壓縮すれば事足りるやうに考へることは、無謀である。一國の經濟は、比較的長い期間について、一定量のものであるから、その一定の生産物を、如何に、處理するかは、長期戰、短期戰のごとき戰爭の樣相から判定されねばならないものである。そこには、軍の統帥者と經濟の指導者との間に、完全にして賢明な協調が行はれることを必要とするであらう。

いま、高度の工業國において、總人口の一割を動員すると假定する。總人口八千萬とすれば、その內譯は、次のごとくである。

| | |
|---|---|
| 男子 | 四〇、〇〇〇、〇〇〇人 |
| 女子 | 四〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 男子人口中の動員年齡層 | 二〇、〇〇〇、〇〇〇 |
| 動員數 | 八、〇〇〇、〇〇〇 |
| 殘存數 | 一二、〇〇〇、〇〇〇 |

この場合、常備軍を一百萬とすれば、動員は七百萬である。一百萬の常備軍は、常に產業勞働から除かれてゐる數である。新しく七百萬の動員が行はれる。この場合、七百萬はその殆ど大多數は、各種の產業勞働力として役立つてゐたものであるから、その國の經濟界は、七百萬の勞働者の缺陷を生ずる。これを以前の狀態にまで塡補するものは、四十五六歲以上の有閑男子、十七、八歲以上、四十歲位までの女子であらう。而して、八百萬の軍隊を支持しその戰鬪を可能ならしめるために、軍需勞働者を兵員一人につき、五人と計算すれば、四千萬の勞働者を必要とする。從つて、殘存靑壯年層を千二百萬と計算するとき、二千八百萬の勞働者が必要である。この部分が塡補數七百萬の外に二千一百萬を必要とする。從つて、有閑または遊休勞働者の動員のみでは、不足することとなり、男子並に女子勞働者の配置が問題となつて來る。從つてかゝることは高度の經濟的發展のない國においては、絕對に不可能であるといふべきである。そこに近代戰における兵員動員の最も强大な規制的要素がある。

## 八

ある程度の技術を前提とする一國の工業力を規制するものは、第一には、勞働力である。このことは、既に、記するところがあつた。兵力量と勞働力量とは、兵員、勞働者といふ關係においては、同じ給源から獲得するものであり、從つて、そこに、ある比率が存在せねばならない。この比率は、兵員一人に對して必要とする軍事産業勞働者の所要量によつて決定せらるゝものである。ポツソニーの「今日の戰爭」においては、この比率を第一次世界戰爭の場合のアメリカについては、一對十七としてゐる。今日の戰爭においては、豫想せらるゝところは、ヨーロッパの大國においては、一對十八であらうとしてゐる。この計算は、やゝ過大に陷つてゐるやうに考へられる。正確な計量に基くものではないが、われわれは、これを一對六―一〇とみてよいのではないかと思ふ。從つて、兵員並に勞働者の配置の問題は、戰爭の遂行にとつて極めて重大である。この問題は、單に量のみでなく、質の問題としても、重視されねばならない。緊急必要勞働者を軍へ動員することは、經濟的にみて不利であるが、現代の高度の機械化部隊は、重工業勞働者を兵員として、歡迎することは、普通である。この場合にも、戰力の基礎としての工業と直接戰力としての軍との必要は競合することとなつてゐる。

産業勞働者の給源としては、單に自國人口のみが存するのではない。敵國捕虜の利用、同盟國または被征服國勞働者の移入のごときは、既に行はれてゐるところであるが、このことは、自國民との比例を失してまで行ふことは、自國のためにも、また被征服國のためにも出來ないところである。從つて、軍の給源の大本が自國または本國人口にあると同じく、産業勞働者の給源もさうである。

軍事産業の遂行のための、また戰力實現のための要件として、食糧生産の重要性については、既に記するところがあつた。而して、軍事産業それ自體の運營と安全化のためには、その原料問題がある。自國内において、原料が獲得し得る場合は、敵側の多少の爆擊を受けたとしても、その地帶が占領されない限り、軍事産業の運營に大きな打擊を加へ得ない。しかしながら、原料の全部を、自國領内、殊に運輸の安全性を確保し得る自國領内において、供給し得る國は、世界において存在しない。いま、主要國における重要原料について、表示すれば次のごとくである。

| 品目 | 單位 | イギリス | 帝國領 | ドイツ | イタリア | ソ聯 | 合衆國 | 世界 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 原油 | 百萬トン | ― | 六・八 | 一・二 | 〇・一 | 二八・九 | 一七二・九 | 二九・七 |
| ガソリン | 同 | 〇・五 | 二・五 | 一・四 | 〇・四 | 六・三 | 六〇・七 | ? |
| 黑炭・無煙炭 | 同 | 二四四・三 | 六八・九 | 二〇〇・〇 | 一・〇 | 一五二・九 | 四四八・四 | 一、三〇七・四 |
| 褐炭 | 同 | ― | 七・九 | 二〇七・〇 | 一・三 | ? | ― | 二三七・〇 |
| 鐵鐵鐵含有量 | 同 | 四・三 | 五・七 | 四・〇 | 〇・五 | 一四・〇 | 三七・三 | 九八・〇 |
| 銑・鐵合金 | 同 | 八・六 | 三・九 | 一九・八 | 〇・九 | 一四・七 | 三七・七 | 一〇四・〇 |
| 銅鑛（銅含有量） | 千トン | ― | 五八三・三 | 三一・〇 | 〇・六 | 九三・五 | 七六三・八 | 一三四八・〇 |
| 銅（製錬數） | 同 | 一六・九 | 四五七・二 | 七〇・六 | 二・九 | 九五・五 | 八一〇・三 | 二三三八・〇 |
| ボーキサイト（原鑛） | 同 | 〇・七 | 三九五・九 | 九二・一 | 三八六・五 | 二三〇・〇 | 四二七・〇 | ? |
| アルミニューム | 同 | 二三・〇 | 六四・〇 | 一六四・〇 | 二五・八 | 四九・〇 | 一三二・八 | 五八一・九 |
| 亞鉛鑛（含有量） | 同 | 七・七 | 五一七・五 | 一七二・九 | 八七・〇 | 七〇・〇 | 五六八・二 | 一八五六・〇 |
| 棉花 | 百萬キンタル | ― | 一二・三 | ― | 〇・一 | 八・四 | 四一・一 | 八二・八 |
| 羊毛（粗毛） | 千トン | 五〇・〇 | 七七〇・六 | 二一・二 | ― | 一五・九 | 一三七・六 | 二〇七・六 |
| ゴム（生ゴム） | 同 | ― | 六〇六・〇 | ― | ― | ― | ― | 一、一五八・〇 |

これらの數字は、第二次ヨーロッパ戰爭勃發以前のものである。この戰爭の世界戰爭への進展によつて、軍行動によつて、占領されたところもあり、從つて今日においては、原料支配についての關係は、相違を來たしてゐる。米英側においては、南洋領域の支配または利用權を喪失してゐるし、樞軸側にあつては、アフリカ大陸の植民地を失つてゐる。しかしながら、原料分布の大體の傾向は、この表によつて、窺ひ得るであらう。この表の示すところは、第一に、原料資材の偏在である。原油のごときは、ソ聯と合衆國に偏在してゐる。銅のごときも、英米ソ領を多量に產出する。ゴムのごときは、イギリス海峽植民地の特產であるが、いまや日章旗の支配下に置かれてゐる。全體としてみると、イギリズ帝國は、資源の豐富を示してゐるが、それはもとよりイギリス本國のそれではなく、植民地屬領におけるそれである。この場合輸送距離と安全性が問題となつて來る。資源の不足に惱む代表的なものは、イタリアであらう。良好の狀態にあるものとみられるものは、米合衆國である。しかも、この國においても、完全は期することは出來ない。ゴム、錫・マンガンのごとき重要物資の不足は、覆ふことが出來ないところである。このための苦慮は、アメリカの參謀本部の資源觀に現はれてゐる。戰略的資源の重要視がこれである。

戰略的資深として、米國の參謀本部が擧げてゐるものに、十四ある。それは第一級、第二級、第三級に分けられる。

第一級の戰略的資源とは、全然外國に依存して代用の不十分なもの。アンチモニー・マンガン・ニッケル・キニーネ・生絲・クローム・マニラ麻・水晶・ゴム・錫。

第二級の戰略的資源とは、國內の生產の不十分を塡補するために輸入を必要とするものである。これには雲母・水銀・タングステンがある。

第三級には國內において大體間に合ふ代用品があるが、尙ほ輸入品の方がよいといふやうなもの、即ち椰子油のごときものがそれである。

この外に、米國の參謀本部は、單に戰爭のために必要とするばかりでなく、國民の生活のために、是非なくてはならぬものを十五ばかり擧げてゐる。アルミニウム・石綿・コルク・黑鉛・皮革・沃度・バンヤ・阿片・光學用レンズ・石炭酸・プラチナ・タンニン原料・ツオール・バナジゥム・羊毛・これである。

大東亞戰爭によつて、かれらが南洋地帶を失つたことは、この苦惱を、一層甚だしくしてゐるところである。

原料は、戰力經濟の基礎を形成するものであるから、戰爭の遂行に對して、重要である。それゆえに、またこの問題は戰爭の重大な原因の一つとしても考へられる。このことは、原料問題の戰力としての重要性を示すものである。フォシュ將軍の言葉として、戰場における一滴の石油は、一滴の血に等しいといふのは、端的に、戰力としての原料の重要性を語るものである。（これらの點に關しては、拙稿原料問題について、三田學會雜誌第三十六卷第八號を參照せよ）

## 九

以上論じたところは、人的並に物的戰力の量の問題である。量の問題は、重要であることはいふまでもない。量そのものが一つの力だからである。しかしながら、その力を眞實の力として發現せしめるものは、單なる量ではない。殊に人的戰力の場合においては、精神力が大きな問題として、立ち現はれる。このことについて、ナポレオン・ボナパアルは、次のやうにいつてゐる。

「銘記すべきは、兵士の數は全く問題でないといふことである。そして、また將校および下士官が指揮することを會得したときのみ、兵士に若干の期待をかけ得るといふことである。予が大軍隊組織の成功をかち得たのは、二

ケ年間たえず訓練された軍隊がブウロオニュの營地においてであつた。」（一八〇七年）

また、いつてゐる。

「一人の兵士を作り上げるのに六ケ月を要するといふのは、誤謬である。吾々は僅か六ケ月では軍隊を組織することが出來ない。ジェマプの戰鬪で九千のオーストリア軍に對し、フランス軍は五萬の大軍を擁してゐた。最初の四年間はフランス軍は實に笑止な方法で戰つてゐた。この戰爭において、勝利を博したものは、新しい募兵ではなかつた。經驗のある古い部隊が勝つたのであり、そのすべては、フランス革命の時、前線に殘された退役兵であつた。新しい募兵は、或は逃亡し或は死亡して了つた。その中の若干のもののみが殘存して、時を經てよき兵士となつたものである。ローマ人はどうしてかくも偉大な事業をなし得たのであらうか。それは一人の兵士を作り上げるために、ローマ人は六ケ年間教育したからである。三千名よりなるローマの一軍團は優に三萬の軍隊に匹敵した。予は一萬五千の護衛隊を率いて、四萬の大軍を打ち破つた。予は新しい募兵をもつて、戰爭することは、十分慎んでゐる。」（戰爭・政治・人間）ナポレオンのいはんとするところは「兵士の數よりも、精神力こそが、勝負を決定する」といふことがある。勿論、このことは、絶對的命題と解することは出來ない。相當な鬪志の敵方にある場合、顯著な數の差は、精神力をもつて、如何ともなし得ない。また優秀な機械的攻擊力を前にして、精神力を過大に評價することは出來ない。精神力も、ある限定を持つべきことはいふまでもないが、さういふ前提においても、精神力は重要である。

鬪爭的精神と忍耐力のない軍隊は、たとへ優秀な機械的攻擊力を持つてゐる場合でも、それを有効に使用し得ない場合が多い。軍隊の訓練が重要視せらるゝのは、こゝである。而して、軍の精神力は、最高統帥者の命令が、最下末端といたるまで嚴正に實行されるところにある。そのためには、軍は、ある一點に精神力を集中してゐなければならない。軍の精神の凝集中心點が必要である。その最も重要視されるものは、國君または國家に對する將兵の忠誠心である。この忠誠心によつて、將兵の行動が指導され、動かされる場合、軍は一絲亂れない規律の下にある。ナポレオンが、「兵士の第一の特質は、誠實と規律であり、勇氣は、第二義的たるにすぎない」といふ所以である。

而して、かゝる忠誠心を涵養するものは、一國のよき歷史的傳統と、よき統治と秩序であり、戰爭における目的の明確性、その大義名分である。そのことのために、盡忠報國の精神を發露し、命を鴻毛の輕きに比して、歡然死に赴くの精神を保持し得る狀態である。この狀態は、精神的には、最高のものであるが、ヨーロッパのごときあつては、必ずしも、さうではない。ナポレオンは、「われらの軍隊は何故ヨーロッパにおいて最强であるか。それは最もよく組織されてゐるのみならず、更に最もよき衣食を供給されてゐるからである」といつてゐる。この言葉に從へば、ナポレオンの軍隊は、組織と衣食の優良性とによつて、支へられてゐるものである。このことは、ナポレオンが、ヨーロッパ大陸を席捲しながら、ワーテルロウの一戰に敗れて、セント・ヘレナ島に淋しい晩年を送るに至つた重大な原因の一つであつたといふことが出來るであらう。軍の精神の凝集點が、「よき衣食」にあつたからである。

從つて、それが不可能となるとき、その軍は、崩壞の前夜に置かれるといはねばならない。

軍の給與の優秀性は、軍を保持する一つの要素であることは、確かである。しかしながら、それが精神の凝集點であつてはならない。それは、單に軍の能率化のためである。軍の精神の凝集點は、歷史的傳統としての國家國君の名譽であり、戰爭目的に置かれねばならない。わが皇軍における「陛下の軍隊」といふ觀念は、最もよくこの凝集點を形成してゐるものであるといふことが出來る。惡戰苦鬪も、困苦缺乏も、かゝる精神的凝集によつて、克服せ

られて、輝しい戰果を擧げてゐる。

かゝる美事な精神的凝集點を持つてゐるからこそ、その軍隊の指揮者は、精緻な用兵作戰と親切な兵の取扱が要望される。そこに、ますます輝ける精神力を發揮し得るからである。そして、かゝる精神力を、最も有効な兵器によつて裝備することこそ、その戰力をますます發揮せしめるものであり、且つ敵側の軍隊に對する思想宣傳に對して擁護するものである。

## 一〇

戰力としての精神的要素は、單に軍に對してのみ要求せらるゝものではない。それは均しく國民一般に對しても要求せられる。何となれば、ルーデンドルフもいふやうに、國民と軍とは密接不可離の關係にあるからである。

「軍隊は、國民の中にその根を持つ。要するに、國民を形作る一部である。從つて、總力戰における軍の強弱は國民の肉體的經濟および精神的強弱に左右される。就中、精神力は、非常な長期に亙る戰爭に際し、國民維持のための生存鬪爭において、必要とする團結力を軍および國民に與へるものであり、この團結はまた國民存亡のためにこの種の戰爭に最後の決を與へるものである。惟ふに今日何れの國家も軍の裝備や訓練を等閑に附してはゐない。而して、たゞ精神的團結のみが、國民をして戰時惡戰苦鬪の中に在る軍に終始新たなる精神力を注入し、軍のために盡し、戰時の苦難の中においても、將また敵の戰爭行爲の下においても、自ら必勝の信念に燃え敢然として、抵抗を繼續させるのである。」（國家總力戰　間野俊夫譯）

何ゆえにかくのごときことが主張されるのであるか。

「吾々は敵の意志を打破し、戰後においては、戰爭の慘狀に堪へ、その後方においては、たとへ敵の占領地域内においても、敢然これに反抗せんがために、數ケ月、數ケ年に亙り敵に對抗して至大の力を發揮し得、凡らゆる危險を認識し、且つ戰爭の永續とともに、ますます發生し易き種々の疑惑に對しても、精神的にも、肉體的にも毅然たる强力な國民を必要とする。蓋し總力戰は一歩も假借しない。總力戰は、男にも女にもその極限を要求し、男子を、その目標とするのみでなく、夫や子を危險の地に出してゐる婦人にも直接指向せられるからである。」（同上四九頁）

このことは、戰線の領域的擴大においてみることが出來る。從來帶狀の領域を戰線として形成せしめてゐたが、航空機の發達は、これを航空機の航續可能の半徑にまで押し擴げてゐる。戰線は、軍の對抗においては、今日においても、なほ帶狀の領域を形成してゐる。しかるに、戰爭は、この領域を越へて行はれてゐる。戰線においては、あらゆる兵器の攻擊を受けねばならないが、それ以外の場合には、主として、航空機による攻擊である。從つて、攻擊の量と質とは、異るものゝ、今日においては、前線、銃後の區別は、殆んどあり得ない。特に一國が戰爭に對して、最も有利な地理的條件にない場合の外は、それは常に攻擊の可能性に爆されてゐる。從つて、國民一般に對して、戰場にあるの精神が要求せらるゝのは、當然である。

國民一般に對して、武力的攻擊の可能性が存するばかりでなく、精神的攻擊の可能性は、常に存してゐる。宣傳戰、思想戰と稱するものが、これである。宣傳戰・思想戰は、主として敵國に對して、交戰國が、相互に行つてゐるものである。敵國民に對する宣傳戰・思想戰は、その國民の精神的思想的崩壞を目指すものである。そして、戰力の國民的基礎を腐蝕・動搖・崩壞に導かうとするものである。その實際的手段は、短波ラヂオの放送・文書宣傳・宣傳者の潛入・航空機による文書ビラの撒布などがある。その目標とするところは、次のごときものであらう。

一　民族對立要求の激成、第一次世界戰爭の場合、英佛米側が、中央ヨーロッパ諸國に對して行つた宣傳は、民族自決主義であつた。この宣傳は、中央ヨーロッパ諸國のやうに民族的に複合國家であり、その對立の激甚であるところにおいては、有効であつた。中央諸國の崩壞の一半の原因は、こゝにあつたといはねばならない。現在の世界戰爭においても、米英側は、大東亞戰爭に關して、白人對有色人種の戰爭であることを宣傳し、樞軸側の足並みを攪亂しようとしてゐる。また相不變民主主義的民族自決主義の宣傳を行つてゐるが、効果は擧つてゐない。

二　國內不平不滿の激化、生活・政治などの狀態に關する眞實もしくは虐構の言葉を流布して、國內の對立を激化しようとするものである。戰時生活の窮屈化は、國民に深く認識了解せしむることを要する。

三　戰鬪の結果に關する虛構の宣傳、戰果を誇大に宣傳し、國民に厭戰思想を養成し、士氣の沮喪を招來しようとするものである。この點において、わが大本熱の發表の正確性が、世界的信用を博してゐることは、强味であるし、眞實は、最良の宣傳であるといふ命題を證據立ててゐる。

四　國內における相手國に對する同情の獲得である。親米・親英論者などといふものがありとすれば、さういふ分子を育成發展するために敵國があらゆる工作をなす場合である。

かくのごとき國家內部の攪亂は、現に戰爭において、敵對しつゝある國家間においては、不可能であるかのごとくである。短波ラヂオの聽取は嚴重に禁止されてゐる。郵便交換の方法も存在しない。人を派することは、素より不可能である。しかしながら、宣傳は、あらゆる手段を通じて行はれる。最も普通に行はれるところは、中立國人の使用である。而して、そのためには、莫大な費用を惜まないものであるから嚴戒を必要とする。

これらの思想戰に對處するためには、國民をして確乎たる精神力を保持せしめなければならない。國民の精神的凝集點は、既に軍の場合に指摘したと同樣である。國君、國家に關する歷史的傳統、名譽の思想である。これを根幹として、國民團結の强化を徹底するのである。

一　政治的團結の强化、政治的對立としての政黨のごときものの解體、一國全體の組織化即ち國民政治組織である。ドイツの場合においては、ナチ黨、イタリアの場合においては、ファシスタ黨である。いづれも、一國一黨の獨裁を實現してゐる。わが國は、これと異つて、一君萬民の翼贊體制がある。米英は、なほ政黨組織を維持しつゝあるが、大統領または首相の獨裁化的傾向は、顯著に現はれてゐる。

二　社會的共同一致、國民の生活の窮屈化は、戰時において、不可避である。このために、國民的團結の弛廢するやうな傾向は、嚴に警戒を必要とする。アメリカ合衆國における炭鑛夫の罷業のごときは、既に解決したやうであるが、戰時においては、最も不利な行動である。わが隣保班制度は、實質的方面においては、團結强化の意味においては成功してゐるといはねばならない。

三　思想指導または思想戰に關する適切な方策がある。

## 一一

直接戰力をもつてしない國內攪亂政策は、思想戰として考へられてゐる。思想戰には、積極的に敵國に對して行ふものと、防衛的に思想攻勢に對處するものとなる。從つて、これを表示すれば、次のごとくであらう。

思想戰
- （イ）積極的思想戰
  - （一）敵國の思想崩壞を目標とするもの
  - （二）中立國の思想動向を工作することによつて、自國側に立たしめるもの
- （ロ）防衛的思想戰
  - （一）敵國思想攻勢に對處するもの
  - （二）敵國側の中立國工作に對處し、これを是正するもの
- （ハ）教育的思想戰——國內における思想確立政策

この積極的思想戰・防衛的思想戰・教育的思想戰は、それぞれ孤立的に存在するものではない。相互に有機的關聯に立つものである。かゝる有機的關聯において、最も重要なものは、自國における思想的統一である。これなくして、積極的・防衛的・教育的思想戰のいづれをも、徹底的に實行し得ない。そこには、中心點がないからである。一度、かゝる中心點が、實質的に確立されゝば、この中心點を旋廻點として、思想戰の種々相がそれぞれ、その處を得て活動することが出來る。從つて、まづ自國における思想の確立である。一國は、その歷史を持つてゐる。即ち、その發展と、發展によつて、達することの出來た段階とがある。この發展の經過の中に、興隆衰退の時期もあつたであらうが、その國としての存立の理由を持つに至るであらうし、また國としての發展の方向を定め得るに至るであらう。その方向を、現在置かれてゐる地位と力とによつて、計量熟考して、出て來るものが、國是ともいふべきものである。一國の思想には、さういふものがなければならない。また一國には、その建國の當初から一つの高い理想を持つてゐる場合がある。さういふ場合においても、その高い理想が、歷史の段階段階において、顯現した形態があつたであらうし、また現在の段階において、持つべき形態が考へられる。理想は、常に抽象的形態で存するのに對して、歷史的現實は、それの具體的形態を要求する。さういふ具體的形態において、高い理想は、始めて一つの政策または體制へ實現化される。

それが國是の具體的形態である。從つて、それは、一國の置かれてゐる歷史的時期と、その存在の世界的地位の考量によつて、決定されるものである。一國家の理想または大方針が、これである。國是とは、これであり、その國是の個々の現象形態的政策への適用が、國策である。國是從つて、また國策も、單なる思ひつきではない。

この國是の理論體系が、國民の指導思想である。この理論體系は、その國家の歷史並に哲學を根柢とし、現實的には、政治・經濟・社會の一切の諸科學の眞の綜合の上に建設されねばならないものである。而して、それは、內に對しては、民族の生命を躍動せしめ、外に對しては、自國の理想・理論・行動を是認せしめる力を持つことを要する。さういふ性格を持つ理論體系は、作つたものではなく、成つたものである。少くとも、長い歷史的發展と民族の生命を打ち込んだものでなければならない。

國是は、國家目的を規制するものであるから、これが確立されて始めて、國家目的も明瞭となる。戰爭は、一つの國家目的を追究する力的手段である。この手段は、國是によつて規制せられねばならない。無名の師を起すことの、古來戒められてゐるのは、大義名分を持たないからである。大義名分とは、確乎たる國是によつて、指導されてゐることがある。戰爭が無名の師でなく、大義名分を持たねばならないといはれるのは、二つの理由がある。その第一は、それによつて、國家の全構成員を戰爭に對して、忠誠ならしめ、これに協力せしめるためである。第二は、戰爭の長期化する場合、國家的、從つてまた國民的團結の强靱性は、このことによつて、發生するからである。

世界の諸國においては、なんらかの意味において、國是を持つてゐるであらう、たゞ、その國の歷史的發展と、その國の置かれてゐる地位の如何に從つては、國是に眞實性を缺き、輕薄性を持つものもある。さういふ國家は、

戰爭に際する場合、戰況の如何に從つて、國是の批判が、國民の間に起り來る危險性が存在するし、またさういふ國家的思想の輕薄性によつて、養はれた國民思想は、動搖の高い公率を持つてゐる。現在の戰爭のやうに、各國がそれぞれの意味において、世界觀戰爭であると考へ、その世界觀の鬪爭を戰爭の一つの重要な部面として用ゐてゐる場合には、思想戰の犧牲たり易いものである。さういふ國においては、世界觀の再檢討、從つてまた再建が要請される。

國是の理論體系としての國家思想が確立されてゐる場合、思想戰の防壁は、一應出來上つたといはねばならないが、思想戰も一つの戰鬪を形成するものであるから、敵側における強力な批判または攻擊が行はれないとも限らない。たとへば、米英側においては、既に戰後の對策をとり上げて、樞軸側に對する思想攻勢を行つてゐるがごとくである。かくのごとき場合においては、ことの重大性に鑑みて、樞軸側においても、最も適切な思想としてのその具體的對策を對置すべきであらう。現にわが國のごときは、對華新政策において、從來米英等が侵略的目的をもつて採用し來つた對華政策を廢棄し、新しい政策をもつて、これに臨んでゐるのであるから、これを擴充し、併せて、わが日本の世界に要求するところを堂々理論的體系において公表するところがあるならば、單に思想戰といふやうな立場のみからではなく、世界を指導する力となるかも知れないのである。

國內における思想の確立は、以上のやうな性格を持つものであるが、確立の過程においては、いろいろの思想の批判統一が問題となる。殊に現在の國家の立場と矛盾するやうな思想が存在するとき、その是正は、最も肝要である。この場合、一般的に思想統一の方法として考へられることは、教育指導である。それは、國內思想戰の意味を持つものであるが、思想戰の「戰」を强調することによつて、ある種の思想の掃蕩・打破・擊滅を期することは、國家的立場として、當然であるが、政治的方法としては、最も賢明であるとはいひ得ない。それが不幸にして同胞によつて懷かれてゐる場合、教育と指導とが、まづ第一の是正方法でなければならない。從つて、その場合、一般の思想への教育といふ見地から、または、一般思想への影響への考慮を必要としないといふ見地からは、思想的論戰を展開することも、よいであらう。さういふ思想的論戰の趣旨は、教導にあるのであつて、威壓や壓迫にあるのでもなく、また個人的攻擊にあるのでもない。このことは、國內思想戰の場合において、最も注意を必要とするものである。均しく同胞であり、國家の構成員であるといふ根本事實を忘却することなく、これを導くことが肝要である。さういふ謙虛の立場に立たない限り、被批判者は、批判者をもつて、獨善的・獨斷的でありといふであらうし、また高壓的權力的であると感ずるであらう。ときとして、思想對策と稱して、他に對して大聲叱咤してゐる個人をみかけるのであるが、かくのごときは、單に反感をそゝる結果を招くに過ぎないであらう。而して、自分のみを宜しとし、他を低級者扱ひにすることは、獨善者の常に陷る缺陷であるが、それらは單に國民中の一致を亂す効果のみしか持たない場合がある。指導者または自ら指導者をもつて任ずる人達の警戒しなければならないところである。

教育指導によつて、國內思想の確立が行はれたとき、思想戰の體制は、その根本が確立されたのであつて、思想戰力――重大な精神的戰力――が形成されたのである。思想戰備が出來上つた譯である。このとき、思想戰の第二段階へ動員することが出來る。第二段階とは、(一)防衛的思想戰としての敵國思想攻勢に對處することであり、(二)積極的思想戰として、敵國思想の崩壞を目標とする本格的思想戰の實行である。

第二段階の第一の敵國思想攻勢に對處する場合は、國內思想體制の確立によつて、防衛體制が樹立されるのであるから、この場合には、武力戰における遭遇戰と同じく、個々の場合の攻勢に對處することである。思想戰として

本格的なものは、國内的體制の確立に對する敵國思想崩壞工作である。このことは、次のごとき事項を包含する。

一、敵國思想の全面的批判である。この場合、自國における思想體制が、最も堅固な基礎の上に置かるべきはいふまでもない。批判の基準が、こゝにあるからである。この基準の下に、敵國の思想に對して假借することなく、合理的批判を下すのである。それは、單なる罵詈讒謗であつては、思想戰の意味をなさない。それは國内における獨り高しとするものの大聲叱咤以下のものとして取扱はれるであらう。この場合、最も必要とするところは、敵を知り、己を知ることである。思想も、毫も武力戰と異らない。不發彈は、効果のないものである。

二、第一は原理的なものであるが、これに對して第二は、實際的な方面に關する思想戰である。敵國の國家の急所を衝くことによつて國民に衝動を與へるにある。敵國の缺陷の指摘である。次に、敵國民が既に潜在的に不平不滿を持つ場合においては、それを明確に指摘し、續いて、その不平不滿の合理的根據を提供し、敵國國内體制の弛讓を誘引する戰法である。

これらは、思想戰の最も重要部面を占めるものである。たゞ、以上の論述によつて、明瞭であるやうに、思想戰は如何なる場合においても、思想的明快性を持たねばならないことである。思想は、信仰の上に立つ場合もあり得るが、それを思想戰の用具として用ゆるときは、その信仰は單なる直感感情の形態においてではなく、明快な論理の形態または事實性の形態において、表現されることを必要とするであらう。さうでないならば、思想戰は、その人の獨りよがりに墮することとなるであらう。警戒すべきことである。

要するに、思想は、戰爭における精神力の增强であるから、さういふ形態において、養成せられ、指導さるべきものである。また思想戰は、武力戰における電擊戰のごとき効果を持ち得ない。一歩一歩、一彈一彈の地味な効果しか擧げ得ないのであるから、その戰ひは持續的でなければならない。それは、すべての思想の存在性格であるからである。

## 一三

戰力としての人的・物的組織的・精神的要素を論じたのが、以上であるが、それらと著しく異るものとして、こゝに擧ぐべきものは、戰力としての自然である。これは、人間の力において、多くの場合如何ともなし得ないものである。勿論最近における技術の進歩は、徐々にこれを克服しつゝあるのは、事實である。交通機關の發達、殊に内燃機關による船艦の航行は、大洋を自在の交通下に置いてゐる。鐵道・自動車の發展は、廣漠たる大陸の進軍を可能ならしめてゐるし、航空機の進歩は、行進の速度を著しく增加すると同時に、防壁としての重疊たる山嶽を越へて、深く敵國内に攻擊を加へる可能性を持つに至つた。しかもなほ、現在の技術の狀態においては、自然は、これを持つものに對しては、一つの防壁たるの役割を演じてゐる。

戰爭は、行動だからである。ナナの戰爭理論家エデュアルト・バンゼは、戰爭は、地理的現象だといつてゐるが、攻勢者にとつても、防衛者にとつても、このことは事實である。戰場が海上に置かれるにしろ、また陸上に存在するにせよ、戰ふものはこの地點にまで到達しなければならないからである。

エデュアルト・バンゼの理論は二つの内容を持つてゐる。

第一、戰域としての領域である。戰域の面積は國の廣さである。一國が廣大な面積から成立してをり、その中に、一定の人口量とこれらの集團の持つ社會的發展が相當のものであるとすれば、その自然的要素は、大きな防衛障壁たり得る。勿論、征服當時のアメリカ・インデイアン族とヨーロッパ諸民族のやうな社會的發展の程度の相違では、

自然も何等の防壓たり得ないが、かくのごとき顯著な差違のない場合には、自然の障害を防禦力として計算しないことは危險である。地形、氣候などの要素も計畫さるべきである。峻嶮な山脈、原始的山林、酷寒暑熱の氣候、傳染病源の存在などが、これである。このことは一國の海岸から二千哩、三千哩への奥地への根據地の設定が、大きな自然的防壁を建設したことを意味するし、氣候的には、『冬將軍』などの言葉によつて現される嚴酷なものは、同じく一つの自然的防衛を形成する。

第二、戰域に常に伴ふ概念であるが、本國の前進基地から戰域にいたるまでの距離である。このことは、戰鬪能力は、戰場への距離の自乗に逆比例して發現せられることである。これは、主として兵站線の問題である。現代のやうに汽車、汽船、自動車、航空機の進歩した時代にあつては、これらのものが存在しなかつたときよりは、戰爭可能の距離は增大してゐる。しかも現在の戰爭のやうに激烈な消耗を伴ふ場合には、交通量の方面から距離が問題とされるのである。

現在の戰爭は、かゝる戰域と距離の自然的條件によつて影響されるところが、甚だしく大である。樞軸國においても、反樞軸國にあつても、船舶、航空機の問題が焦眉の急を告げてゐる。何れも其增產に懸命の努力を拂つてゐるのは、このためである。

大東亞戰爭において、わが日本は戰略的に優位な據點を占めてゐる。太平洋における敵據點の占領は、このことを示してゐる。戰爭の直前米英は、わが日本に對するABCDの包圍陣の形成を誇大に宣傳したのであるが、この包圍陣が、殆ど完全に擊破された。

しかしながら、現在の段階において、敵米英はわれに對する包圍陣を完全に失つたとみることは出來ない。敵の包圍陣は著しく後退してゐる。ダツチ・ハアバア（アリユーシヤン群島）――パアル・ハアバア――マニラ――シンガポール――重慶と結んでゐた包圍陣は、東部において、ウエーキ島、西南部において、香港、フイリツピン、マレー半島、ビルマ、東印度諸島の占領によつて、著しく後退してゐる。わが東京を中心として最小二千哩の半徑をもつて描いた太平洋の水域は、わが制空、制海の權下にある。

アメリカ合衆國の西部基地――サンフランシスコおよびサン・チヤゴを起點として西へハワイのパアル・ハアバアがある。パアル・ハアバアから北にミツドウエー、ダツチ・ハアバアの線がある。西南に米領および英領諸島を通じて、オーストラリアに向ふ線がある。アメリカ――オーストラリア線ともいふべきものだ。前線上のソロモン群島において、わが占領地から南に延びる線とほゞ直角に、戰火が交鎖されてゐる。ガダルカナル島がこれである。

オーストラリアから北上してインドに達する線は、インド洋の中を通ずる路線であるが、東印度、馬來半島、ビルマを制壓された敵は、この路線の安全を期することは容易なことではあるまい。

しかしながら、これらの據點に重慶を加へて、現在においても、日本に對する包圍陣形の殘骸を持つてゐるだけは、たしかである。この包圍陣は、經濟戰爭的意味を持つてゐるだけに、わが國によるその克服は、わが國にそれの有する經濟力をある程度まで與へたことになる。その外側に形成されてゐる米英の陣形は、わが國に對して海空のゲリラ的戰術によつて消耗を促進させようとするものである。かれらが、潛水艦戰術を誇稱し、東京空襲を宣傳してゐるのも、その目的は、こゝにあるであらう。そのことは絕對不可能のことでないことは、わが當局もこれを認めてゐる。われわれは、これに對して充分の準備を必要とする。

いまゝかゝる見地からわが日本の現在置かれてゐる地位をみよう。日本邊周における敵最大の根據地は米本土である。米本土はアラスカのアリユウシヤン群島からカナダに及び、更にワシントン州、オレゴン州、カリフオルニア州に續く、太平洋東岸を形成する。その前進基地は、東北部においてはアリユーシヤン群島のダツチ・ハアバアである。東京を起點として、グツチ・ハアバアまで二六五八哩である。中央部の基地はサン・フランシスコ並にサンヂヤゴである。その前進基地がハワイの眞珠灣である。さらにミツドウエー島である。

サンフランシスコ――眞珠灣　二〇九一哩

サンヂヤゴ――眞珠灣　二二七八哩

眞珠灣――ミツドウエー　一一四九哩

米本土から眞珠灣へ二千餘哩ミツドウエー島へ三千二百餘哩である。この最前線から東京への距離は、二千二百五十哩である。わが本土へ最も近いウエーキ島（大鳥島）は千七百四十哩である。ウエーキ島から眞珠灣までは二千四哩である。

そこで、グツチ・ハアバアからわが東京へは、二千六百五十八哩であるから、東太平洋方面から日本への最短距離は、ミツドウエーの二千二百五十哩である。更に、西方をみれば、第一に支那大陸がある。蔣介石軍の根據地ばゝ日本への反樞軸軍陣營における最短距離であるが、蔣介石軍は、二つのものを持つてゐない。その一つは海岸線であり、他の一つは、航空條件である。在支アメリカ空軍は三、四百機の戰鬪機　爆擊機を持つてゐるが、わが日本への攻擊を可能ならしめる爆彈、燃料の輸送路に大きな困難がある。第二は、インド方面である。昭南島まででも、海路二千九百五哩に及ぶ。この方面からの直接の航空は、不可能である。南の方面は、ソロモン群島に近い、ラボールまで既に二千五百五十哩であり、オーストラリアのシドニイまで行けば、四千三百七十五哩の遠路である。

これを大觀すると、わが日本の周邊約二千哩以内においては、敵の使用し得べき航空基地は存在しない。支那大陸の重慶側は、これよりも近距離であるが、前述のやうな次第である。だから、われわれにして、この距離的防壁を完全に維持すれば、わが本土に對する攻擊は容易のことではない。

戰力の發揮における原則は一層このことの容易でないことを示してゐる。戰力の發揮は距離の自乘に反比例するといふべきである。戰線への距離の大小は、他の條件において均しいものとすれば、戰力の大小を示すものである。同じく三千哩の距離の航路線を持つものとすれば、それは一對一であるといひ得る。しかるに、一方が二千哩、他方が四千哩の航路線を持つ場合には、輸送の關係において、後者が甚しく不利である。

いま日本に對米英の戰爭において、對英海戰において、ベンガル灣を戰場とすれば、英本土のプリマスから、約七千哩であり、わが九州の港から三千五百哩であらう。オーストラリアのシドニーとすれば、英本土から一一、二〇〇哩の距離を持つてゐる。對米海戰において、東太平洋においては、ミツドウエーは、米本土と日本本土とのほゞ中間に位してゐる。南方太平洋においては、アメリカからの距離は、わが距離に比して、著しく遠い。しかも、この對米海戰において、わが艦隊の持つ便宜は常に、內線作戰であることである。その行動は、圓の中心から一定の半徑をもつて足りるしかるに、アメリカ海戰の行動は日本海戰の勢力の分散または消耗を策するためには、常に、かゝる日本の行動半徑の圓周をはるか西方から、東方へかけて行動しなければならないといふ點に、行動半徑の巨大性が隨伴してゐる。このことは、空中戰についてもいひ得るところであつて、行動半徑の大きさが障害をなしてゐる。それを克服するための太平洋上から日本爆擊の後、支那大陸にいたる行動半徑の短縮においても、既に失敗

してゐる。

このことは、陸上においても、いひ得ることである。獨ソ戰において、ドイツが強力な力を持つにも拘らず、その結末に容易に達し得ないのは、第一にソ聯領土の廣大な面積を持つことである。この廣汎な領域の上に、多量の人口とウラル山以東のウラルグズネッツ地帶の攻擊圈外のところに持つ經濟戰力があるからである。第二には、ソ聯領の持つ氣候である。ソ聯領の氣候、殊に寒暖は、ノールウの海岸を北流して、ナルヴィックにまで達するメキシコ暖流からの距離によつて決定されてゐるものゝごとくである。而して、この酷寒は、特にかゝる氣候に慣れてゐないものにとつては、行動の困難をすら感ずる。ドイツ軍はこの困難を克服しなければならないのである。かゝる氣候と領域とを有つソ聯は、自然的防壁を持つものといふことが出來よう。勿論、これを克服することは絶對不可能ではない。相對的困難であり、巨大な戰力は、これを克服することが出來るに至るであらう。

すべて戰力としての自然は積極的なものではなく、防壁としての役割と價値とを持つに過ぎないのであるから、これに過大な評價を與へることは愼まなければならない。自國の持つ自然力は、これを計算外に置き、敵國に存する自然的防壁を考量することこそ、愼重な態度といふべきであらう。

以上の戰力論は、戰力を靜態的に觀察したものであつて、これを動態的に如何に組織するかは、別の機會において論ずることとして、こゝに筆を擱く。（昭和十八年五月十七日稿了）

# 統制經濟における計畫

氣賀健三

第一節　國家的經濟計畫
第二節　經濟計畫の伸縮性
第三節　計畫の經濟的基準
第四節　國家的欲求判斷の經濟的合理性
第五節　國家的欲求の生產性

## 第一節　國家的經濟計畫

現代の統制經濟が構成的であるといふときは、その特質として、當然一定の全體的計畫性を備へてゐなければならぬ。全體的計畫性のない統制經濟は決して構成的といふことができない。而して構成的・計畫性といふことは更に、當然一定の目的を念頭においてゐるものであることを要する。即ちある特定の方向に向つて國民經濟を指導しようとする意圖を持つてゐるものでなければならぬ。

現實の歷史的經過において、國家の積極的な全體的計畫性を俟たずして發展せる國民經濟から、今日の世界各國